

上海の用心棒 1

kairando

ドアを叩く前から、男の叫び声は聞こえていた。うなるような、脅すような口調である。

檜垣亮介がノックする間もなく、ドアが開いた。

チョッキを着た痩身の白人男性が、紙巻き煙草震える指で持ったまま出てきた。それをくわえて、マッチをすろうとして、はじめて檜垣に気付いた。

その青い瞳に戸惑いがうかがわれたが、彼はすぐにドアを開いて、中に声をかけた。

「お待ちかねの客人だ」

その声に、ブロンドの男が振り返る。エドワード・グラント。ピンカートン探偵社上海支社の探偵である。

中肉中背で、割れた顎の髭を拳でこすりながら、室内の女性に何やら説明をしていた。

黄浦江から吹いてくる生暖かい風以上に、彼は熱いのだろう。シャツの脇には汗腺の位置を示す図がはっきりと現れている。

彼は檜垣を見つけると、大きく目を見張って、額に貼り付いた前髪をかきあげた。

「リョー。電話で話した通りだ」

事態は何も進展していないのだろう。

男の怒鳴り声が聞こえてくる。

「ミス・チャンに逢わせろ！」

亮介はグラントに軽くうなづくと、唇の端をゆがめた。

「つまり二時間、こうしてるのか？」

亮介のところに電話がかかってきたのは、一時である。

虹口《ホンキュー》の礼査飯店（アスターハウスホテル）にきてくれ。グラントはそういった。

二階の事務所の窓から、身投げをしようとしているイギリス人の男がいます。それも要求は毎晩、上海じゅうのナイトクラブの舞台に招かれて、美声を披露している香港の歌手キャサリン・チャンに逢わせろというのだ。

「会って、どうするんだ？」

そう電話口で尋ねる亮介に、グラントは応えた。

「それも聞いてくれないか」

バロック様式の重厚な外観である。窓から這い出ても、一メートル程度の縁が設けられており、清掃夫が使用して、窓を拭く。男はなおも叫んでいた。

「俺を殺したいのか？　俺は本気だぞ？」

亮介はグラントが煙草をすすめてくるのを制した。

「彼の名前は？」

窓の外で、壁にもたれかかりながら、足元の人々を見下ろして、何やら叫んでいたが、窓の外のためによく聞き取れなかった。

室内は木目の美しい机や本棚。黒川のソファと、いかにも実業家好みの内装である。

だが、そこにいた人々の表情は不安に淀んでいた。一様にグラントの言動に目を奪われていたが、彼が次第に口を開きかけたが、しゃべるのをやめたり、深いため息を繰り返すのをみると、次第に誰

もが沈痛な面持ちに変わっていった。

リョー。グラントは憔悴しきった表情で、亮介を部屋の隅に引き寄せた。

「この会社のオーナーには、以前から世話になってる。それに窓の外で叫んでる小僧の親父には、今も世話になってるんだ」

グラントにとって世話になるとは、具体的には経済的な支援のことである。つまり借金しているというのだろう。ここで恩をうって、返済を楽にしたいという思惑もあるようだった。

そのために事態を收拾したい。グラントはさすがのような眼差しで、亮介に訴えかけた。

「お前だって、目の前で人が飛び下りるのを見たくないだろう？ 助けられた人間をみすみす見殺しにするなんて、寝覚めが悪いもんだ」

いかにもそうした経験があるかのように、舌打ちをした。

亮介は相手が話し終わるのを待つと、グラントのホルスターに納まっているリボルバーを指さした。

「待った。銃は必要ない。神経を逆撫でて、死なれたら困る」

グラントが手のひらで拒否を示すと、亮介は鼻先で笑ってみせた。

「野蛮なカウボーイ。相手が逆上した時の用心に貸して欲しいだけだ。俺まで、ひきずり落とされるなんて、ごめんだからな」

グラントは亮介の言葉に、一瞬ためらいを見せたが、舌打ちをして、三十八口径コルトを取り出すと、グリップを亮介に示した。

亮介はそれを受け取ると、腰の後ろに指して、窓を見た。

男が出ていった右の窓以外にも、部屋には窓がある。中央の机の背後に、ひときわ大きなガラス窓がはめ込んであった。

「そっちの窓のあける用意だけしておいてくれ」

亮介はグラントに振り返りもせずにと、右の窓に群がる人々を押し退けて、窓の外に出た。

生暖かい風とともに、足下の観衆がかすかにどよめくのが聞こえる。三階からこれから、人が落ちようとする瞬間を人々は待ち構えているかのようにも見えた。

男はすぐに亮介に気付くと、その場に立ち上がった。

唇を興奮のためにわななかせて、血走った目で亮介を見る。

「説得しようとしても、無駄だぞ。ミス・チャンに逢わせるまで、一步も……」

言葉が終わるのを待たず、亮介はうなづいた。そして腰からコルトを取り出すと、相手の足元に向けて、立て続けに二発撃った。

男は慌てて、飛び上がり、その場で飛び跳ねた。

「踊れ。もっと高くだ」

亮介はいいながら、さらに高い位置をめがけて、二発発砲した。男はさらに高く飛び跳ねたが、バランスを崩して、コンクリートの縁から落ちそうになった。観衆たちがどよめく。

租界地とはいえ、白人たちに混じって、苦力《クーリー》たちや、車引きたちがたむろしているのが見えた。

「私は命を弄んでいる。君もだ」

亮介は銃口を相手に向けたまま言った。

男は驚きの余り、呆然としていたが、やがてその場にしゃがみこむと、ブロンドの前髪の間から、亮介を睨んだ。

「チャンに逢わせろ」

亮介は弾丸があと二発残っているのを一瞥してから、男に言った。

「いい考えがある。確実にチャンにあえる方法だ」

その言葉に音は動揺を隠しきれなかった。亮介のほうに身を乗り出して、言葉の続きを待った。

亮介は苦々しく微笑みかけて言った。

「ここから飛び下りるんだ。なに、痛いのは一瞬だ。そうすれば、審判の日にチャンにあえる。ヨボヨボの婆さんだがな」

男の表情はみるみる曇った。余りに馬鹿馬鹿しい応えだったことに、苛立っているようにも見えた。

「あるいは……」

亮介がいうと、男は目を細めて、相手を見た。それを確かめてから、亮介は微笑して言った。

「ここで俺に撃たれるか、だ」

ふざけるな。男は口のなかでつぶやいた。

「俺は本当に、ここから飛び下りるぞ？ 本気だぞ？」

その逼迫した口調に、亮介は首を振った。命と引き換えに、ミス・チャンに会いたいだと？

亮介は往来に向かって、上海語で叫んだ。

「金を隠すのを手伝ってくれないか」

するとどうだろう。苦力や車引きたちがみるみる集まってきた。早くしろと声をかけてくるものもある。男にもその様子は見て取れたらしい。短く悲鳴をあげると、男はその場に腰をおろした。

「なんだって？ なんであいつら、集まったんだ？」

亮介は一笑してから言った。

「毛子《マオツ》（白人）は血が白いのを、見たことあるかと聞いただけだ」

「馬鹿な。何をいってる？」

男の動揺をよそに往来の人ばかりから、声が上がる。

亮介は手早く弾倉を外して、残り二発残っているのを確かめると、ゆっくりと戻した。

「飛び下りるか、撃たれるか。好きな方を選べ。君たちカトリックは自殺を禁じられているんだろ？ せめて、殺され方ぐらい、選ぶがいい。それとも、決めて欲しいか？」

亮介は無造作にコルトを構えろと、銃口を男に向けた。

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神よ、わが神よ、なぜ我を見捨てたもうや）」

大袈裟な口ぶりで亮介がいう。男は相手の口元が綻んでいるのに、気付いて、尻餅をついたまま後ろににじり寄る。亮介が引き金を引くと、男の足の間のコンクリートが弾き飛ばされ、破片が男の頬をかすめる。

男はとっさに頬をに手を当てると、小さな切り傷ができていた。

「痛いだろ？ でも、もう苦しまなくていいんだ。自由な世界が目の前にあるじゃないか」

亮介が往来へ目を転じ、そこへ顎でしゃくって示した。

その瞬間である。

男はすきに乗じて、視界の端にあった大窓に飛びついた。そして、そこから伸びていたグラントの腕にしがみつき、室内に転がりこんだ。

今度は室内で、男が何やら叫び始めた。

「金はどうしたんだ？」

苦力の一人が怒鳴る。亮介は肩をすくめた。「俺も待ってるんだがね」

亮介は元来た窓から、室内に戻った。

中では騒動が始まっていた。男の同僚や、使用人たちが彼を病院に連れて行くために、いろめきたっている。インド人の使用人が気難しい表情で、男の頬傷に脱脂綿を当てて、血を拭いている。

「リョー、お前、何をやってるんだ！」

グラントが怒鳴りながら、亮介の腕をつかんだ。唇を引き結ぶと、亮介は言った。

「手短に片付けた。あいつは決して、自殺なんてしない。ちょっと悪ふざけをしてしまっただけだ。俺と同じだよ」

グラントは反論しようとか何かいいかけたが、それより先に、一人の女性が割って入ってきた。早口に何かを言って、亮介を軽く抱擁した。

「あの男のかみさんだ」

亮介は抱擁を返すと、軽くうなづいて、離れた。

「お前は無茶をしすぎるんだ」

出鼻をくじかれたグラントは、ため息まじりに言った。亮介が差し出すコルトをしまった。

「すまない。五発撃った」

それが悪い冗談だと思ったのか、グラントは顔を背けると、顔の前で掌を振り払った。

「あたらなかっただけ上等だ」

緊張が途切れたせいか、それだけいうと、疲れたように椅子を探して、そこにへたりこむ。

それを見つけて、数人が話しかけてくる。彼自身の探偵としての行動に加えて、配下と思われる男をどうやって、使っているのか。危険な仕事は彼にやらせることができるのか。いくらぐらいで雇っているのか。

グラントがしばらく息を整えていたが、自分ではどうすることもできなかったことが、逆に時間稼ぎに見られていることに、気をよくして、コップの水を受け取ると、周囲にゆっくり語り始めた。

冗談を交えて、聴く者を楽しませるのはグラントのもっとも得意とするところである。亮介は喜色満面で語り始めたグラントを尻目に、部屋を出ていった。

「ハルピンでコサック兵に囲まれた時は、さすがに俺もだめだとおもったよ」

グラントの名調子がドア越しに聞こえていたが、亮介は失笑を漏らして、階段をおり始めた。